

式 辞

散りゆく桜の花が美しい真美ヶ丘キャンパスにおいて、畿央大学大学院健康科学研究科、同教育学研究科、畿央大学助産学専攻科および同臨床細胞学別科に入学を許可されました皆様に、心からお慶び申し上げます。

皆様が、大学院および助産学専攻科、臨床細胞学別科で、専門的な知識と確かな技術を深く学ばれ、諸先生方のご指導の下で、将来の夢の実現に向けて努力研鑽されることに、大きな期待を寄せております。

学園創設者の冬木智子先生は学園における教育のあり方についての夢と理想を、「徳をのばす」「知をみがく」「美をつくる」の建学の精神としてまとめられました。

そのなかで「知をみがく」ことについて、「人間の進歩向上とは、自己の才能を最大限に練磨することである。知識欲を失えばただ退歩あるのみである。私たちは飽くことなく頭脳を磨き、励まし合い、研究的な態度を養いたい。」と説明されています。

「研究」とは、特定の物事について、既存の知識を集めて考察し、実験、観察、調査などを通して調べて、その物事についての事実を深く追究する一連のプロセスです。「知をみがく」で示唆されている「研究的な態度」とは、「なぜか」という疑問を解き明かす努力を続けることにより、物事を深く追究する姿勢である、と私は考えます。

この研究のプロセスの中には「分かる」という瞬間が含まれています。「分かった」を思える瞬間は何にも代えがたい喜びであり、楽しいことでもあります。ここにおられる皆様が、「なぜか」という疑問を持ち続け、分かるまで探究を続けるということを実践していただき、専門知識を深く学んでいただきたいと願う次第です。

専門分野の知識は、個別の事柄に関する要素知識をまず理解することが必要ですが、さらに個々の要素が互いにどのように関係しているのかを知ることが必要です。それらの関係が分かると、その分野の専門知識を体系的に理解できます。体系的に把握できるようになると、関連のある他の専門分野の知識との関係も見えてきます。

個々の要素知識とそれらの関連、さらに全体と要素、手続きや時間的に変化する振舞いなどの理解、このような捉え方を「体系」的な、あるいはモデル的な捉え方といいますが、学びの過程において、知識の「体系」として理解を深めていただきたいと思います。

このように研究対象に関する知識を体系として捉える努力を続けていると、知識に別の「分かり」があることに気づくと思います。個別の対象に対する分かりとは別に、すべての対象に共通することに関する分かり、「汎用的・普遍的な」と呼びますが、そのような抽象化した捉え方での分かりがあるということです。

高いオリジナリティのある研究には、個別の物事に対する分かり、知見だけでなく、さらに汎用的・普遍的な視点で、新しく見出した知見が含まれています。そのような研究ができることを目指していただきたいと思います。

繰り返して申しますが、ここにおられる皆様が、諸先生方の指導の下に、自立的に探究的な態度でもって、深い学びを実践され、将来にわたる大きな成果を得られ、日本の社会における人の幸せに貢献されることを心より期待いたします。

以上をもちまして本日の式辞とさせていただきます。誠におめでとうございます。

令和五年四月三日

畿央大学 学長 冬木正彦